

避難と帰還をめぐる分断 ―「てつがくカフェ@ふくしま」における対話より―

小野原 雅夫（福島大学）

1. 「てつがくカフェ@ふくしま」 震災・原発事故関連テーマ

開催日	回数	テーマ
2011/5/22	第1回てつがくカフェ@ふくしま	いま、〈ふくしま〉で哲学するとは？
2011/10/22	てつがくカフェ@ふくしま特別編	いま、健康をてつがくする ―福島で人間らしく生きるために―
2011/11/26	第6回てつがくカフェ@ふくしま	〈安心〉は共有できるか？ ―放射能をめぐる〈温度差〉とは何か？―
2012/3/10	てつがくカフェ@ふくしま特別編2	あれから1年 〈3.11〉で何が変わったか？ ―震災・原発をめぐって―
2012/5/19	第10回てつがくカフェ@ふくしま	切実な〈私〉と〈公〉、どちらを優先すべきか？
2012/12/23	第1回シネマdeてつがくカフェ	伊藤照手監督作品『声の届き方』
2013/3/10	てつがくカフェ@ふくしま特別編3	フクシマはどこへ？ ―絶望と怒りの淵から―
2013/5/18	第5回本deてつがくカフェ	高橋哲哉『犠牲のシステム 福島・沖縄』
2014/3/15	てつがくカフェ@ふくしま特別編4	震災・原発事故3年目の福島から考える ―忘れる力は必要か―
2014/8/24	第2回哲学書deてつがくカフェ	森一郎『死を超えるもの ―3.11以降の哲学の可能性』
2015/3/7	てつがくカフェ@ふくしま特別編5	鎌仲ひとみ監督作品『小さき声のカノン ―選択する人々―』
2015/7/11	第7回本deてつがくカフェ	開沼博『はじめての福島学』
2016/3/6	てつがくカフェ@ふくしま特別編6	〈揺れるたましい〉と生きることの根源 ―震災・原発事故から5年あの日を振り返る―
2017/3/11	てつがくカフェ@ふくしま特別編7	〈3.11〉は終わったのか？ ―7年目の震災・原発事故の過去・現在・未来― (阿部周一監督作品『たゆたいながら』を手がかりに)

2. 「てつがくカフェ@ふくしま」の記録より (<http://blog.goo.ne.jp/fukushimacafe>)

【第1回てつがくカフェ@ふくしま報告より】 テーマ「いま、〈ふくしま〉で哲学するとは？」

3. 11以降の〈出来事〉の意味を参加者から意見を出していただきながら議論に入っていました。まず、この〈出来事〉のさなかに考えようとしても、誰かと面と向かって話すことができずに頭が整理されないままだったという意見、自分がこの状況において何もできないことや、なぜあの人が犠牲になり自分が生き残ったのか、その問いに答えが出ないことがわかっていながら考え続けてしまう自分、逆に考えることに疲れ、思考停止した方が楽だったという意見など、この〈出来事〉の意味に答えが出せないことの苦しみが出されました。これに関しては、やはり震災をテーマにした東京の哲学カフェでは、体験の共有に終始したというお話が挙げられましたが、そこにもまたこの〈出来事〉の意味の捉え難さが示されています。

しかしながら、そのように理解不能な状況であるからこそ、言語化することによって整理する必要があるとの意見も出されました。それについては、自助やセルフカウンセリング的な癒しの効果を期待する意見が挙げられました。むしろ、食糧難に見舞われる被災状況の中では、生命維持や生活のために必要なものとは違った意味で、この事態を言語化する機会の必要性を感じたとの意見も出されました。もちろん、言語化すること自体がロゴスを纏う哲学の本質的な部分と関わることは言うまでもありません。では、「哲学する」とはカウンセリングや自己確認のためのお喋りのことなのでしょうか？ もちろん、それとは重なる部分があるにしても、それらとは異なる哲学の固有性を析出してみたい、実はそんな思いが主催者側にはありました。

これについて議論では、単なるお喋りとは区別される〈対話〉と哲学の結びつきが指摘されました。その意見によれば、〈対話〉とは相手との意見とのぶつかり合いの中で相互の異質性を際立たせながら展開されるものであるとのことです。その点で、今回の哲学カフェのテーマは対立点や論点が明確化しにくいとの指摘もありましたが、たしかに哲学カフェの醍醐味もこうした他者との異質な意見の交錯にあるといえるでしょう。しかし、これに対しては論争的ではないまでも、多様な意見が出される中で、各人がそれを受け止めながら自分の思考を深めたり変容させたりする要素として、他者の意見を聞く意味があるのではないかと意見も提起されました。いずれにせよ、哲学カフェの本質や課題を衝く議論であったように思われますし、この問いは哲学カフェを続ける中で常に問い続ける必要があるように思われます。

【てつがくカフェ@ふくしま特別編報告より】 テーマ「いま、健康をてつがくする」

「正しい情報」とは何でしょうか？ 私たちは「マイクロシーベルト」や「ベクレル」という言葉をしょっちゅう耳にしますが、現状に応じて変更される「安全基準」（そんなことがあっていいのか!?!）が何なのか、もはや科学的な根拠で安心を得ているわけではなくなっている実態があります。そうすると、正しい理論が「安心感」をもたらすのではなく、むしろ事実は逆で、自分の「安心感」を正当化してくれる理論だけを信じているのが実際なのではないのでしょうか。すると、やはり個人個人によって異なる放射能に対する危機感、つまり「感覚の違い」が問題の焦点となってきます。

議論の中でもとりわけ発言が集中したのは、この「感覚の違い」にもとづく「温度差」という問題でした。もちろん、福島から離れた地域へ避難した方からは、その地と福島との危機意識の差も指摘されました。しかし、深刻なのはむしろ、家族や友人、地域といった身近な場所で生じる「温度差」の問題です。洗濯物の干し方一つ（外で干すか干さないか）で、自分と「感覚」が近いのか遠いのか確認するという話や、夫婦のあいだで異なる放射能への危機感（これについては男女による感覚の違いも指摘されました）の相違と不信。特にこれから子どもを作ろうという世代の夫婦のあいだでは、「子どもをつくる／つくらない」ことの判断が分かれる苦悩も吐露されました。これは避難をめぐっ

て家族内で生じた分裂にも当てはまるでしょう。この「温度差」によって友情が失われたとの話も出されました。避難する／しないをめぐって家族・親戚から非難を受けたとの体験も挙げられました。「心の健康」ということめぐっては、この人間関係の分断という問題が深刻であったことが浮き彫りになりました。

さらに、避難する／しないをめぐっては「負い目」という問題も挙げられました。ある参加者によれば、福島に残りたかったにもかかわらず、避難させるために迎えにきた親によって、不本意ながら福島から離れざるを得なかったことへの「負い目」が語られました。その参加者によれば、まさに被曝の地を離れることによって、「何か発言する資格がなくなるような気がした」とのことです。また、年配の参加者からは原発設置を阻止することができなかったことに対する「負い目」についても語られました。このように、自らの責任において生じたわけではない「負い目」を強いられていることこそが、まさに「人権を侵害されている」ことに他なりません。

これに関しては「健康で文化的な最低限度の生活とは何か？」という問題提起とも関わってくるでしょう。「福島から離れてはじめて深呼吸ができた」や「東京の空気がうまいこと」など、空気を吸う、水を飲むといった当たり前のことが当たり前にできなくなってはじめて、わたしたちは「健康で文化的な生活」への問いを抱かざるを得なくなってしまうました。さらにここでは、首都圏という大多数の「公益」のために犠牲となった福島をどのように考えるべきかという「正義」の問題を問う必要があるでしょう。公益と人権、犠牲と正義。このキーワードが「健康」と結びつくことで「人間らしい生」が見えてくるようです。

【てつがくカフェ@ふくしま特別編2 報告より】 テーマ「あれから1年、〈3.11〉で何が変わったか？」

何かを変えるためには行動も必要であるという意見も挙げられました。その際、「変わる」とことと「変えること」についての違いについて論じる意見も出されました。それによれば、何事も諸行無常のように自ずと「変わる」ものであり変わらないものなどないけれども、「変える」のは、その人の意志が介入していることになります。たしかに、〈3.11〉以後も何をしなくても社会は変わっていくでしょう。しかし、そこには少なくとも「否」という意志を示したりすることで、自動的な流れ（それは支配層に都合のいい流れともいえるのではないのでしょうか）に楔を打ち込み、流れを「変える」ことになります。こうした主体性がなければ「変わるべきこと」も変わらないだろう。そんな意見も出されました。

いや、そもそも「変わるべきこと／変わるべきではないこと」という設定が間違いであって、あの〈3.11〉で犠牲になった人々、そしてこれからその犠牲になるかもしれない人々のことを考えれば、〈変わらざるをえない〉のだという強い意見も出されました。そもそも〈3.11〉以前が異常な犠牲のもとで成り立つ社会構造であったことを踏まえれば、この出来事から私たちが変われるかどうか問われているということの重さが伝わってきます。重苦しい問いや発言が続く中で、では〈3.11〉以後の変化は希望に結びつくのでしょうか？

そのことについて震災後、さまざまな惨事があったけれど、そして考えたくもないことを考えざるをえなくなったけれど、ひょっとしたらそれは私たちにとってよいきっかけなのかもしれないと発言してくれた参加者がいました。平穏な日常では考えもしなかった人生の苦しみ、答えのない問いを考え続けるのは、少なくとも考えない人生よりはましかもしれない。この発言をしてくれた参加者は13歳です。哲学カフェはこうした属性を解除して語り合う空間なのであまり年齢にこだわりたいはありませんが、大人と対等に、かつ堂々と主張する中学生がこの場に自分の意志で参加してくれたとい

う事實は、やはり希望の光の一つとってよいのではないのでしょうか。

【てつがくカフェ@ふくしま特別編3 報告より】 テーマ「フクシマはどこへ」

今回のテーマは「フクシマはどこへー怒りと絶望の淵からー」。実はこのテーマを決めるに際しては、世話人のあいだで議論になりました。当初、福島組からは「福島は犬死にか？」というテーマの提案がありました。しかし、これに対して東京組から、そのテーマの過激さについて待ったがかかり、メール上での議論のやりとりを経て、ようやくこのテーマに収まったという経緯があります。今回のカフェ冒頭では、その経緯について5名の世話人からそれぞれの思いを語るころから始めました。

まず東京組から「福島は犬死にか？」というテーマ設定には、先の衆院選結果に対する感情的な反応が含まれており、様々な意見を出し合うフォーラムとしての哲学カフェになじまない、「犬死に」の意味の受け止め方が福島県内／外の人々で異なり、そこに距離の問題や言葉のもつ意味のズレ、違和感がある、「犬死に」という言葉は東京に住む人間にとってきつく感じる、犬死にはけっきょく生き残ったものの判断である等など、テーマへの違和感が提示されました。それに対して福島組からは先の衆院選結果へのショックを経て、あたかもフクシマの犠牲がなかったかのような政治情勢、社会的空気に対し、「フクシマの犬死に＝犠牲を認めよ！」という意味が込められたこと、しかしその感じ方が果たして福島に住むものとして閉鎖的に感じるだけなのか、県外の声から確かめたい、さらにそれは果たして福島の問題だけではなく日本全体の問題として考えたかったとの意見が提示されました。これらテーマに込める世話人たちの思いを皮切りに、議論は「犬死に」をめぐる展開します。

世話人の問題提起の中では「犬死に」をめぐる福島県内／外との温度差とも言うべき溝を「ウチとソト」という言葉が用いられましたが、これに関して東京から参加された方から、「たしかに東京の人間が福島の人々に向かって「犬死にだよ」とはいいいにくい、けれどこの言葉は東京の人間だからこそ言いたいし、言うべきだ」との発言をいただきました。ここには、福島犠牲が無駄であったという事実を糊塗するかのよう、巷では安っぽい「希望」や「がんばろう〇〇」、「復興」といったスローガンが喧伝されることへの批判的視線が含まれています。たしかに、被災地の外部の人間が被災者に対して「キミたちの犠牲は犬死にだったのだ」ということは傲慢の謗りを免れないかもしれません。にもかかわらず、この発言者が自らの立ち居地と居心地の悪さを引き受けながら被災者と向き合おうとする、覚悟ある姿勢に共感させられたものです。少なくとも自分の負い目を払拭するためだけに被災地入りして、口当たりの言い言葉だけを並べ連ねるだけの支援者とは位相を異にするのではないのでしょうか。

ただし、こうした「犬死に」ということに対しては、2年間という時間の中でどのように向き合ってきたかは一様ではありません。ある参加者は、被災直後ではわからなかったが「2年という月日を経過する中で、だんだん犬死にを認定させられていった」といいます。一方、2年経っても「絶望と怒り」という感情が収まらないなかで、周囲の楽観的な様子や原発を推進してきた政党の党首が来福した際、福島の人々が手を振る姿を見て、この絶望感が自分ひとりだけなのかといった孤立感に襲われたと発言して下さった方もいます。この「怒りと絶望」あるいは「犬死に」という無力感は、時とともに癒されることもなければ、時間の経過とともに深まるといった様相もあるようです。

【てつがくカフェ@ふくしま特別編4 報告より】 テーマ「忘れる力は必要か」

震災・原発事故から3年目を迎え、もはやこの出来事が風化に晒されそうになっている問題を提起させていただきながら議論に入らせていただきました。まずは、「忘れる力の反対はなんだろうか？」

という問いかけから、それは「覚えていること」や「記憶していること」と思いがちだけれども、むしろそのように意識的自覚的に覚えていることではなく、忘れていたある衝撃や体験を「思い出すこと」なのではないだろうか、という意見が挙げられます。人間はいくら覚えていよう、記憶にとどめておこうとしても圧倒的多数は忘れていくものでしょう。だから自覚的に覚えていようとすることが「忘れる」の反対語だと考えがちですが、その忘却の穴に落ち込んでいた記憶が立ち上がっていくことそのものが「忘れる力」の反対だというわけです。これが自覚的に立ち上げる能動的なものなのか、ふとある香りを嗅いだ瞬間に記憶が呼び覚まされる受動的なものであるのかは興味深い点です。

別の参加者からは、まず「個人の記憶」と「共同体の記憶」のレベルがあることを分けた上で、「個々人には忘れることは必要だ」、けれども忘れられないものだけが記憶に残っていく一方で、「忘れてはいけない記憶」があるじゃないか、といいます。これに関して別の参加者は、「責任能力」というものが「忘れてはいけない記憶」に関係するのではないかといます。犯罪行為が行われたことを忘れることは、また同じ過ちを繰り返させてしまうのではないか。責任を問われることは忘れてはいけないというのはこのような意味でも理解できます。

また、その意見に対して別の参加者からは、「出来事」に近ければ近いほど忘れないのではないかと意見が挙げられました。この意見によれば、体験したものだからこそ、出来事の意味をよく知るのに「より適切な場所にいる」ことになります。しかし、その反面で、その発言者は「朝鮮半島の植民地化」などの事実、わりに忘れやすいものだと言います。それはつまり、自分の体験から遠いものであるからだし、だからこそ「出来事」の当事者はそれに向き合う責任が生じるものだと言います。出来事の内部にいる人間は、そのつらさや過酷さを生身で体験しているがゆえに、それを外部の人間に伝える責任があるのだ。しかし、内部にいる人間がもっともよく知っているというのは本当なのでしょうか？ そもそも「内部」とは何か？ 原発事故を「内部」で体験した人間とは誰のことなのか？ 原発避難を余儀なくされた地域の人々なのか？ 高線量汚染に晒されているにもかかわらず強制避難区域には指定されなかった地域なのか？ ホットスポットが見つかった関東地方の地域なのか？

こうした議論も含めて、しかし「忘れてはならないこと」が未解決のままに残されているのは現在でも変わらないわけですが、そうであるにもかかわらず「考えなくなっている」、「思考を止めてしまっている」、このことそれ自体が「忘れる」ということではないかという意見が出されます。しかし、それは他方で過酷でつらい経験をいつまでも思い出しては生きること自体が困難になってしまいうでしょう。そうであるがゆえに、「忘れること」は「生きるために」必要なことだと言います。したがって、個人には「忘れる権利」がある、しかしそれに対して共同体が存続するためには「忘れてはならない記憶」というものが必要だし、その責任はむしろ、先に挙げられた意見とは真逆に、もっとも忘れそうな立場にある「当事者以外の人々」にこそ求められるべきだという意見が出されました。

このような議論が展開される中、そもそも「忘れる力」という言葉にはやはり違和感を抱くとの意見も挙げられます。あるいは、「忘れる力」なんて福島に生きる人間に必要なではないと思っていたけれど、この「3. 1 1」を血肉で体験してしまったことから、その考え方が転換してしまつとの意見が出されました。ふと、そのことが顕在化するとつらくなる時もあるけれど、実は県外に避難したものの苦悩の方が辛いのではないか。というのも、福島から避難した人たちは、いま、福島がどうなったかもわからないだけでなく、放射能汚染リアリティが消えてしまっているという話を聞くといいです。だからこそ、ここにいる我々は真正面からこの問題に向き合うべきではないだろうか。原発事故によってパンドラの箱が開き、地獄の蓋が開いてしまったことを私たちは「見てしまった」。「見て

しまった」以上、我々はそれを外に伝える責任がある。それが「フクシマ」人として生きることを引き受けるということであり、自分と戦いながら伝えていくということではないか、という重い決意が表明されました。

その一方、当事者にも部外者にもなりえない位置にいたという参加者からは、罪悪感を抱く思いが語られながら、言論人・文化人が「〈フクシマ〉に向き合う」や「当事者に寄り添う」とまとめたしまったが故の危うさが感じられるとのほなしが出されました。言い換えれば、「「フクシマ」を忘れない」ことを利用する人々がいるのであり、それはこの後にさらに大きな出来事があったとき、実はこの出来事がぶっ飛んでしまうのではないかと、言います。この話を聞きながら、私は以前、研究者である友人から「福島が学問の植民地化にされている」という話を聞いたことを思い出しました。「フクシマ」が消費されていると言ってもいいでしょう。震災直後、ある集会で研究者に対して市民が、福島を研究のために消費していることを糾弾した場面があったことも思い出しました。

福島の内と外。震災・原発事故の経験の有無。避難した人間とこの地に止まった人間。こうした区分によって、しかしそれぞれに複雑な罪悪感や苦悩があることは、すでに避難者の思いに触れた発言にも見られました。果たしてこうした内／外の区別は妥当なのでしょうか？ 真にこの出来事の核心にいた人間とは誰のことなのでしょう？ 体験した人だけが、真にその出来事の意味を知るものなのでしょうか？ その内部で体験したものだけが出来事を忘れえないのでしょうか？ その人々だけが忘れてもよい権利を持つのでしょうか？ 「忘れる力」を問うには、この問題圏を避けては通れないようです。

3. 「てつがくカフェ@ふくしま特別編7」における参加者の発言

【てつがくカフェ@ふくしま特別編7】 テーマ「〈3.11〉は終わったのか？」

「（映画の中で）自主避難する理由はわざと省略したのか、自主避難する説明の必要性を感じなかったのか？ 避難することに対してなぜ避難するのかというところから入っていないから、この映画はわかりにくかったです。お子さんがいて危ないから避難するのであって、子どもがいるからってだけで避難でわけじゃないとは思んですけど…。映画の中では主に自主避難の困難について描かれていたけれど、動機の部分が語られていないので心情がわかりにくい。なぜあれだけ苦労しながら自主避難したのかというところが理解できませんでした。」

「わたしは映画の中に出ていて、ちょっと興奮して「行けたんだからいいじゃない」と言っていましたけど、（避難した人たちの）気持ちは分からなくはない。私もあの人たちとおなじ避難の話を聞きに行ったんです。そういう情報を集めて発信する会があって。メルアド登録したら毎日のように情報入ってくるんです、早く逃げましょう、と。あれを読み続けていたら洗脳のように、いてはまずいと思ってしまったのではないのでしょうか。毎日、子どものために逃げなければと思ってしまう。だからこそ、気持ちはちょっとわかるなと思いました。」

「わたしは4年ほど関西に自主避難をしていたんですけど、なので映画の中に映っておられた方々も友だちで、難しいですね。放射能とか原発事故の問題が起こってしまったために、選択をしたかしかかったかで棲み分けみたいな感じになってしまって、属性を示しちゃうというか、分けられてしまっ

て。わたしは子どもがいるわけではないので母子避難ではなくて、前の就職先に戻ったんですけれども、自主避難者ってくくられてしまうと、わたしは子どものために避難したわけではないので避難先でもはじかれて、住宅支援も単身者にはありませんでしたし、わたしには最初からなかった住宅支援について戦っている場面を見て、うーん。仕事さえあれば福島に戻ろうと思っても仕事はなく、逃げたよね、と言われていました。危険か安全かの二元論で決めつけられるのはいやでしたし、どっちかに入っちゃったほうが楽かな、特に京都などでは反原発の人たちに祭り上げられて、危険だって言っていれば支援してもらえる。そういう空気が避難先にはありました。」

「わたしは小4の終わる頃で正直、震災は通り道っていうか、地震が起きたで終わりだったし、毎日友だちの家に手紙を届けに行っていました。みうちゃんが会津に避難して、逃げだと思わなかったし、避難できる人はしちゃえばいいと思ったし、でも同年代の人で、放射線のことを気にしたりとか震災のことを気にしてる人あんまりなくて、親と子の間で震災に対する認識が違うのかなって。ニュースとか見ててもいまいち、ちゃんとした怖さをしらないっていうか。作業員の方が放射能浴びて被害があったって言うけど、自分たちの居る所がどれほどひどいかわからないし、被害に遭った人が自分の周りにいないし、大丈夫かなっていうのがあります。逆にすごい気にされる大人の方がいるけど、なぜそんなに気にするのか。将来子どもが病気になるかもとか言われても、なるときはなるしって思う。」

「うちの娘は高3で、自主避難してます、もうすぐ帰ってくるけど、わたしはいやだな。時間を進めたい。経済的に厳しいから帰ってくるしかないんだけど。うーん」

「自主避難という判断を誰がするのか、子どもは判断しない、親の判断によって避難する。子どもはまったく意識していなかったところで、いじめにあったりすることによって自分の境遇を意識する。親が家族のためを思って避難するという事実と、子どもどう思うかにギャップがある。子どもがどういうふうに避難を受け入れ、自分の居場所をどう作っていくのか。自分が避難したっていうことの親の後ろめたさ、葛藤が子どもに伝わる。いじめられるっていうニュアンスで語られるとき、子どもが一番被害に遭うんだと、大人の都合で判断したことが子どもに影響するんだと思います。」

「今日のこの会は自主避難の是非を問う場ではない。安全か危険かを議論する場ではないと思います。もう6年経ってるのにみんな成長してない気がして。それぞれがもっと成長してもいいんじゃないか。それぞれが選択を迫られたにもかかわらず、被害者どうしが対立することによって、その成長が全然現れてこない。」

「監督が何に主眼を置いているのかわからない。自主避難の苦しみ悲しみばかりクローズアップされている。だから最初の質問が出る。ある程度はリスクは回避できたとは思いうし、その喜びがもっと描かれていてもよかった。どんな選択においてもいい面悪い面はあるはず。でも、つらいことありますか、と言われたらつらいことばっかり出てくる。インタビュアーに引っ張られる。悲しい面だけを報道されるような気がする。避難先のお子さんにはインタビューされてないし…。」

「インタビューはしたんですけど、子どもにカメラは回せないという問題があって…。子どもたちは

みんな、なんで避難するんだと親を責める感じでした。全員そうでした。」

「子どもたちに3年後くらいに聞いたことあったけど、リアリティがやっぱりない。大人が話してるのを聞いて、頭では理解し始めるけれども、リアリティがなくて。実はそれは大人も同じかもしれない。自主避難というのは完全に政治的な言葉で、ただ単に避難した。それでよけい問われるみたいな形になった。避難した人と避難しなかった人、おそらくは感度の違いでしかなかった。安全神話、このごろ誰も言わなくなったけど、ちゃんと知識としてもってる人はほとんどいなかった。それが今までできてしまった。たゆたいながら、とても美しい言葉だけど実際はとまどいながらためらいながらうろろしながら、6年経ってしまった。まもなく避難指示解除、転んでもタダでは起きない、なら何をつかんで起き上がるのかが問われている。」

「被害者どうしが、いがみあわないよりはいがみあったほうがいい。本当に分断したら何も生まれない。思いきりぶつかりあってみてどこまでわかりあえるかわかんないですけど、最後の最後でわかりあえないねってなるかもだけど、それでもお互いの気持ちを伝え合う場があったほうがいい。」

「大事なことはできるだけ共有したい。今日の映画の中でどなたかがおっしゃってたけど、普通の生活ができなくなる。自分の責任ではないのにできなくなるってことをどのように受け止めるのか。また政府から強制的に避難をさせられる人と、いわゆる自主避難をする人。人間必ず大きな決断をしなければいけない、決断が正しかったかどうかは最後までわからない。分断とか、対立とか、違いが問題になってますけど、わたしの住む人口 34000 人の町に数十名の自主避難者がいます。町ごと移転してこられたんですけど、3週間ほど前に避難者の方々とお話しする機会がありました。やはり終わったという雰囲気、過去の話という受け止め方をする人が非常に多くなった。被災地の話をするとき「もっと前向きに元気を出していきなさい」と言われてしまうようで。避難者どうしの対話もない。県営住宅にいますが、その町はとても生活保護者が多い町で、その中で県営住宅に住んでいる避難者に向かって「お金もらっていいですね」と言われる。じゃあこれから福島県はどうしたらいいんだろう、わかりません。でも知らなかったことにはできない。現実はどう向かっていくか考えなくちゃいけない。」

「今日の映画の感想、印象的なシーン、わたしはずっと福島に住んでいますのでわたしは全編が印象に残る。この6年間のわたしの気持ちをなぞるようにどなたかが発言をしていると思いました。結局この映画の趣旨という話も出ましたが、結局まだたゆたっている、という現実。無理に進歩したとか前進したとか思わないようにしようと。あんまり進歩したフリすると落とし穴があるかなと。」

「とにかくこの映画をみたことでいろんな感情が出てきましたし、被害者部分ばかりで残念に思った。進歩していないでもいいのかって思う部分もあるし。この1年福島にいたけど、こういう場はこの1年どこにもなかった。場がない。だから良かった。」

「わたしは話きいてていろいろ考えたんですけど、このまま、わたしたちはこういう現実があったということを伝えていくことが大事じゃないかな。終わってない。まだこれからも続く。こういうことがあったんだよ、と伝えていけるような映画だったし、これからもそうしてほしい。」